

江戸時代における数量指導に対する考え方について

— 育児書からの検討 —

安齊 智子

Education of Mathematics in the Edo Period

— The Investigation of Childcare Books —

Tomoko ANZAI

1. はじめに

数量は、我々人間の生活にとって欠かせないものであり、代々我々に伝達されるとともにその概念や使用範囲は発展を遂げてきている。そして、数量概念の発展は、様々な学問をも発展させ、また我々の生活を便利なものにした。数量の概念や数量を取り扱う能力を身につけることは、人間が生活する上でどの時代にも要求されてきたことであるし、現在では人間の知的能力の1つとして価値の高いものと捉えられていると言える。

幼児教育の現場である幼稚園では、これまで幼児期の数量指導がどうなされるべきかという議論が何度も繰り返されてきている。日本に幼稚園が設立されて以来、保育内容の1つとして数量指導がどうあるべきか、また、どうなされるべきかについては大きな課題であった。安齊(1999年)は、幼稚園が設立されて以来の幼稚園における数量指導の変遷を詳細に整理した上で、わが国の幼稚園における数量指導はそれ以前の日本の伝統的な生活や発達観、そして欧米から輸入された思想や学問の影響を受けているとした^(注1)。これからの幼児期における数量指導を考える上で、その変遷を整理し検討することは有効である。しかしながら、幼稚園という狭い範囲では不十分である。安齊(1999年)が指摘するように、日本の伝統的な生活や発達観が影響しているのであれば、さらにさかのぼり、幼稚園設立以前の江戸時代において数量指導に対する考え方がどのようなであったかを検討することが必要と思われる。

江戸時代において数量指導がどうなされてきたかについての研究は、寺子屋という特定の場における検討はなされてきている。しかし、江戸時代における幼児期も含めた数量指導の考え方の全体的流れを捉えることも必要である。江戸時代は、印刷技術の発展により、書物が読まれるようになった時代であった。江戸時代に論じられるようになった子育て論が書かれた育児書から数量指導の考え方を検討することは、その1つの手がかりになると考える。

本論では、幼稚園及び学校設立以前の江戸時代において、子どもに対する数量の指導がどの

児童学科 保育内容研究室

ようになされるべきと考えられていたかについて、育児書を資料とし、整理、分析し、検討しようとするものである。

2. 研究方法

江戸時代には、印刷技術の発展と商業の発展により、多くの育児書が出版されている。本研究では、江戸時代に読まれたそれらの育児書や育児に関する書物の中で数量指導に関する内容がどのように扱われているかを整理する。資料は、「子育ての書1～3」に収録された江戸時代の育児書を用いた^(注2)。この「子育ての書」は当時の子育てに影響を与えたとされる文献が掲載されており、江戸時代の大人側の数量指導に対する考えや願いが読み取れるものと考えられる。

これらの文献を分析することにより、人間にとっての数量とは何か、数量の指導はどうかされるべきかについて、江戸時代にはどのように考えられていたのか、検討を試みることにする。

3. 江戸時代に読まれた育児書からの検討

江戸時代には、多くの育児書や育児に関する書物が書かれている。これらの中において、数量に関する指導はどのように扱われ、述べられているのだろうか。「子育ての書1～3」に収録されている育児書やそれに関する書物から、数量の指導に関する内容を抜き出したものが資料1から資料12である。

これをもとにして、江戸時代には、数量に関する能力についてどのような価値観を持っていたのか、またそれを発達的に見てどの時期からどのように指導すべきと考えていたのかについて、整理し、述べてみようと思う。

(1) 武士を対象にした家訓としての育児書

江戸時代は、封建社会であり、「家」の存続に重きをおいているので、子育ては「家」の後継者づくりという意味合いが強かった。そのため、武士社会では「家」を存続させるための家訓が作成された。その家訓の中に、子育てに関する内容が意識的に取り入れられるようになるのは、近世に入ってからと言われている。こうした武士階級を対象にした家訓の中に書かれた育児や教育について述べられたものの中に、数量の指導について書かれているものは資料1に示した貝原益軒の『貝原篤信家訓』(1686年)である。

貝原益軒は、武士は文芸を学ぶべきであると説き、その文芸の内容の1つとして算数を挙げている。武士として生きるために単に武芸が長けているだけでは不十分であり、武士は戦うのみでなく他の様々な武士としての仕事があるのであり、こうした仕事をこなす上で、算数は重要な学問の1つであると捉えられているのである。

また、貝原益軒は子どもが六歳になると、組織的な学習が行われるべきとし、その教育課程

や教育方法を構想している。数量の指導に関しては、「六歳の正月、始めて数の名と、我が邦の仮名を習わしむべし。」¹⁾と述べている。「数の名」というのは、おそらく、物の数とその数詞のことであろう。六歳という年齢から、物の数とその数詞を教えるということを構想していたのである。

(2) 母親としての女性を対象とした教訓的な育児書

子どもを育て、教育する母親としての態度や行為について、教訓的に説いた書物も江戸時代には多く出版されている。『いなご草』『女重宝記大成』『唐錦』等、女性を対象にした妊娠、出産、子育てに関する心得や行為を具体的かつ詳細に書かれたものがこれである。その中の中村惕斎によって執筆された『比売鑑』(?年)の中には、資料2に示すように数量の指導に関する内容が述べられている。

そこには、六歳頃から物を数えるということや方角について教える、九歳では日にちを数えたり干支について教える、など具体的な内容が述べられている。年齢的な発達を意識した数量の指導の必要性を考えていたことが読み取れる。

(3) 一般庶民を対象にした育児書

元禄期(1688~1703年)に入ると、農村と都市の文化の発展により、育児書等の書物は、それまでの上層階級の一部の人々から町人や上層農民という一般庶民にも広く読まれるようになった。そして、それ以前の子育て論は家訓などに見られるような「家」の存続に重点をおいた内容であったが、「安定した社会のなかで子どもの内面的成長に注意しながら育てる努力がみられ²⁾」ようになって、子育て論は特定の状況における狭い内容ではなく、「子育ての方法の普遍性を目指し³⁾」た書物が出現した。

その代表的な育児書が貝原益軒の『和俗童子訓』(1710年)である。また、医学的な視点から書かれた。香月牛山の『小兒必要養育草』(1703年)も多くの人々を対象に書かれている。この2つの書物の中でも数量指導に関することが述べられているのである。(資料3、資料4)

どちらの書物においても、算数は人間が生活していく上で非常に重要な能力の1つであることが具体的な事例を挙げて説かれている。そして、金銭の計算をする商人だけでなく、武士も農民も、どの身分の人も皆、算数を学ぶ必要があると述べられている。武士は、兵力、財力の分析や部下をまとめたり、農民に対する年貢の取りたてなどの仕事があり、その仕事を遂行するためには算数を学ぶことが重要であると、中国における考えを引用して述べている。農工商については、どのような理由かははっきりと述べられていないが、家業に専念することを重視しながらも算数を教えることも必要であるとしている。

また、さらにそれを学ぶ時期やその内容についても述べられており、『和俗童子訓』では六歳より数詞を教え、『小兒必要養育草』では十歳より算用、つまり計算(そろばん)を学ぶこ

とが必要とされている。こうした数量の知識や能力については、階級を問わず、つまりどのような生業においても、人間が生活する上で必要な能力の1つであることが強調され、それは人間の生活文化を高めるとの認識によっている。

貝原益軒の『和俗童子訓』は育児の普遍性を求めていたので広く一般庶民にも受け入れられる育児書となったが、一般庶民に向けられた育児書は、庶民に対する教化的意味合いも含まれていた。資料5に示した『自修編』(?年)はその1つであり、農家の生まれで儒者である小町玉川が心学道話を講説したものをまとめたものである。ここにも数量指導について、その始期と内容が書かれている。これによると、八、九歳に算盤を教師から教わる必要があるとしている。資料6の『父子訓』(1811年)は、父親としての態度が説明されているものであるが、数量の指導については、すべての身分の人において、十歳からそろばん・計算を学ばせる必要があると解き、とくに商人の子どもはこれに重点をおくべきとした。しかしながら、あまり早期に急いで指導することはよくないとし、その子ども一人一人の発達に合わせた指導の必要性についても述べている。一方、資料8の『養育往来』(1839年)では、遊芸は幼い時期から教えるのは良くないが、読書算は早くから教えることが必要であるとした。(その時期は示されていないが…)また、資料7の『民家要術』(1831年)においても、算術を学ぶことが必要であると、とくに位算を学ぶのがよいと具体的な内容が示されている。

これらの書物は、どの身分の人にも何らかの数量に関する知識、能力が必要であることを一般庶民に向けて説いているものである。そして、育児書が書かれた時代が後になるほど、その教育方法についても具体的に述べられるようになっていくのが特徴的である。江戸後期になると、数量指導を始める年齢とその内容が具体的に示された書物が多くなり、また身分により指導の内容が具体的に示されたり、さらには子ども一人一人の発達に合わせた指導についても意識されるようになっていた。江戸時代は、数量に関する知識や能力を身につけることに関心が急速に広がっている時期と言える。

(4) 農民・商人を対象にした育児書

元禄期になり、広く一般庶民にも目が向けられた育児書であるが、農民や商人という特定の対象に焦点を当てた育児書がある。資料9と資料10、資料11がそれである。

資料9に示した岡熊臣は、国学者という立場であるが、「農民の本分と農家の子弟が何を学ぶべきか」⁴⁾を『農家童子訓』(1820年)の中で説いている。そして、ここには農民を対象にした数量指導の考え方が述べられている。

農民は、算術を強いて学ぶ必要はないが、という前置きがありながらも、「——— 米一石二斗三升四合五勺六才、銀七貫六百五十四匁三分二釐一毛の数の字ほども弁え、———」⁵⁾と具体的に農民として身につけるべき数量の知識の内容が示されている。農民という身分の人は、農業を営むために必要な数量の知識を身につけることが重要であるとの考えを読み取ることが

できる。

一方、柴田彦太郎の『世わたり草』(1788年)(資料10)、脇坂義堂の『撫育草』(1803年)(資料11)は、商人を対象にした育児書である。柴田彦太郎は「——手習い・読書・算盤など精を出し——」⁶⁾と述べ、脇坂義堂は「十二、三歳の頃までは、手習い・読書・算術をよく教え学ばし。」⁷⁾と述べている。金銭の計算をしたり、それを記録しなければならない商人にとって、読書算は重要な能力の1つとして捉えられていると言えよう。そして、これは子ども期から学ぶことが奨励されている。商人として生きるために、数量は欠かせない能力の1つであり、子どもを商人として一人前にするための重要な教育内容の1つであったのだろう。

生まれたときから生きる道が決められている階層社会に生きた江戸時代の人々にとって、その道に必要な能力を身につけることに最も重点がおかれるのは当然のことである。農民や商人に向けられた育児書では、農民としての数量の知識、商人として扱わなければならないそろばん、計算の教育が必要とされている。そして、それはその生業に実践的に用いられる能力の教育であることが前提であり、農学者である大蔵永常は『民家育草』(1827年)の中で、筆算が得意でも学問としての実践的でない能力は、家業をおろそかにするので良くないと説いている。(資料12)

江戸時代は、それぞれの生活において実践的な数量の知識、能力を重要視していたと言える。

(5) 江戸時代における数量指導に対する考え方の特徴

江戸時代は、士農工商という身分により、その生活や生活に対する価値観が大きく異なっていた。しかしながら、身分を問わず、数量に関する知識や能力が人間の生活にとって身につけなければならない事柄の1つとして広く認識されはじめた時期であったと言える。それは、様々な学問を発展させ、人間の生活文化を高めるとの認識によっているのではないだろうか。けれども、やはり、それはそれぞれの身分の生活の上で必要な数量に関する知識や能力であり、その内容は身分によって若干、異なっている。本業に専念することが最も重要なことであるとの考えが前提になっているのである。江戸時代にはそれぞれの実生活において実践的である知識や能力としての数量を獲得することが求められていた。

江戸時代に身につけることが求められていた数量に関する知識や能力の内容は、主に2つであった。1つは、ものの数を知ること、つまり、基数の理解である。もう1つは、計算であり、この時代には主にそろばんに重点がおかれていた。

さらに、江戸時代は、身につけるべき数量に関する知識や能力の教育方法が具体的に考えられ、実践された時期でもあった。貝原益軒の『和俗童子訓』に見られるように、すでに江戸前期から、子どもの発達を意識した教育方法が考えられていたのである。貝原益軒の考えをはじめ、『比売鑑』、『小児必要養育草』、『自修編』、『父子訓』、『養育往来』、『撫育草』などにも、どのような数量指導をどの時期に始めるかその内容と年齢が具体的に示されている。そして、

それらのほとんどの育児書において、簡単な物の数を知ることは六、七歳頃から、計算、そろばんは九、十歳頃から教えるのが良いという考えで一致していた。このように具体的に、子どもの発達と教育の関係を意識していたのである。また、年齢を基準としてその発達を捉えてはいたが、江戸後期になると、『父子訓』において子ども一人一人の発達に合わせた指導の必要性も意識されていたことは、注目すべき事であった。

資料1 『貝原篤信家訓』(1686年) 貝原益軒

- 一 士は、事繁き者なれば、一芸・一材に長ぜるのみにては用は立たず。次第を以て、博く文の芸を学ぶべし。文芸は、和礼〔書礼・茶礼とも、この内にあり〕、書法、文字の学、算数等なり。——
- 一 六歳の正月、始めて数の名と、我が邦の仮名を習わしむべし。——

資料2 『比売鑑』(?年) 中村揚斎〔1629~1702年〕

- 六つの年より物数うる事を教え、方角を指し示す。——九つよりは日を数えて干支を知り、

資料3 『小児必要養育草』(1703年) 香月牛山

○ 算用の事、十歳ともならば習うべきなり。今時なまの物知りの武士などは、「算用とは、商売家の業にして、武士たらんものの、すべき事にしもあらず」などという類多し。これ僻事なり。

—— 大道寺という老功の臣申されけるは、「算用をまず御習わせあるべし」と云いければ、近習の若侍ども、目ひき鼻ひき笑いけるを、氏綱見給いて、「何を笑うぞ。大道寺が云う所もっとも至極なり。兵書に『兵を出すには、日に千金を費やす』と説き、または『兵食の多寡を算す』と見えれば、人に将たらん者は、算用を知らずしては、軍旅の事調いがたかるべし。大道寺、この事を勘弁して申したるなり。吻の黄なる者の知る事にあらず」とて、氏康の芸の習いはじめに、算用を習わせられたると、古老の物語に伝え侍る。その上、天文・地理の学問をなし、千歳の日至日月の蝕などという事も、みな算用を以て知る事なり。士農工商、共に算用を知らずして、何事か成就すべき。入る事を数え出る事をはからざる者は、必ず家を失うものなり。

しかは云えど、いとけなき子の、十露盤はやく、人の前にて算用・金銀・利徳・売買の事をいうは、見苦しき事なり。何事を習うとて、内外の差別あるなれば、算用の事などは、人前に押し出して習う事にしもあらず。中花の聖人も、「十歳にして書計を学ぶ」とありて、物書くと算用とを並べて云い置き給えば、ゆるがせにせんや。されば聖人の、算用をおもてにし給う事もなく、氏康、諸芸の初めに算用を習い給えど、算用者という事も算用だての事を云い給う事も『北条五代記』にも見えず、一切の芸能は、知りて知らぬという事あり。その芸を隠して、入用の時、取り出すべきなり。

資料4『和俗童子訓』(1710年) 貝原益軒

四民ともに、その子の幼きより、父兄君長につかうる礼儀・作法を教え、聖經を読ましめ、仁義の道理をようやく諭さしむべし。これ根本をつとむるなり。次に、もの書き・算数を習わしむべし。――

六芸のうち、物書き・算数を知る事は、誠に貴賤四民ともに習わしむべし。――

また日本にては、算数は賤しきわざなりとて、大家の子には教えず。これ国俗のあやまり、世人の心得違えるなり。もろこしにて、いにしえは天子より庶人まで、幼少より皆算数を習わしむ。大人も、国郡にあらゆる民の数をはかり、その年の土貢の入りを計りて来年出し用ゆる分量を定めざれば、かぎりなき欲にしたがいて限りある財つきぬれば困窮にいたる。これ算を知らざればなり。また国土の人民の数を計り、米穀金銀の多少と、軍陣に人馬の数と糧食とをかんがえ、道里の遠近と運送の労費をはかり、人数をたて軍を遣るも、皆算数を知らざれば行いがたし。臣下にまかせては、おろそかにして事をたがう。故に大人の子は、殊にみずから算数を知らずは、つとめにうとく、事欠くる事多し。これ日用の切要なる事にして、かならず習い知るべきわざなり。近世或君の仰せに「大人の子の学びてよろしき芸は、何ぞ」と問い給いしに、その臣こたえて、「算数を習い給いてよろしかるべし」と申されける。いとよろしき答えなりけると語りつたう。およそ尊きも低きも、算数を知らずして、わが財祿の限りを考えず、みだりに財を用いつくして困窮にいたるも、また事にのぞみて算を知らず、利害を考うる事もなりがたきは、いとはかなき事なり。――

農工商の子には、幼き時より、ただ物かき、算数をのみ教えて、その家業を専ら知らしむべし。――

六歳の正月、始めて一二三四五六七八九十百千万億の数の名と東西南北の方の名とを教え、その生まれ付きの利鈍をはかりて、――

小児初めて手習いするには、先ず一二三四五六七八九十百千万億、次に天地・父母・五倫・五常・四端・七情・四民・陰陽五行・四時・四方・五穀・五味・五色などの名目の手本を、真字に書いて、大いに書き習わしむべし。

資料5『自修編』(?年) 小町玉川〔?~1838年〕

○ おおよそ児八、九歳に及ばば、或は文武、或は手跡・算盤、一切の諸芸、その才性のちかきに從いて師に就きて学ぶ。――

資料6『父子訓』(1811年) 中村弘毅

○ 十歳より後、そろばん・算術の事を学ばしむべし。その術をきわめ知る事は、年をかさね心を尽して学びざれば、得がたしとなり。されど四民日用手近く入用のことは、理に

さとき人ならば、数月の間にも習い得べければ、同じくは年長じて、ものの弁えもいでき
て後教えなれば、却って上達も速やかなるべし。商売の家は、算を何よりおもとして、幼
少より早く習わしむる人多けれど、子弟とも勞して功すくなく、ただにいそぐゆえ、却っ
ておそき理もあれば、算を教うるはいそぐべからず。さりながら、その子の才の利鈍にも
よるべし。

士たる人及び富商の家などは、そろばんはいやしきわざのようにこころえ、知らざ
るを上品の人がらなりとするは、大なるひがごとなり。そろばんは、数といて六芸
の一つにして、貴賤となく習わずしてかなわぬわざにて、家・国・天下を治むるに有
用のものなり。とうとき人も、必ず学びたまうべきなり。

資料7『民家要術』(1831年) 宮負定雄

——算術は関流の点竄術を習わずべし。算術を学ぶ者は、位算をよく明らむべきなり。

資料8『養育往来』(1839年) 小川保麿

先ず四、五歳より添木をいたすが如く、漫りに繁らさず勝手自由なる悪しき枝葉の蔓延
らざるよう不家業にあらぬ遊芸などを雅きものに教はゆるはよろしからぬ事にして、得て
身の仇となる者になり。唯、手跡・読書・算術、これらは早く教えて事欠かぬ様にすべし。
——この節、方角あるいは一二三の数、十支・十二支等を教ゆべし。

資料9『農家童子訓』(1820年) 岡熊臣

——百姓の子どもには手足を遣い働く事を教え、鋤を持っては田畑を掘り打ち、斧・鎌
を取りては、草木を刈り切るの術を習わずべし。手習い・算術は強いて習うに及ばず。わ
ずかに我と父母・兄弟の名字を書きおぼえ、米一石二斗三升四合五勺六才、銀七貫六百五
十四匁三分二釐一毛の数の字ほども弁え、御祝儀・樽肴代・初穂・香典などの書きよう、
また米・麦・大豆・小豆・角豆・黍・稗・粟・藁麦の種物を文字知わば、百姓の物識りと
もいうべし。

——しかれども、当世の風習にて、百姓も文字を書き、物を読み算法をも心懸け、
雑芸にさえ携わるをよき事とするなれども、これは甚だよろしからぬ習わせなり。

資料10『世わたり草』(1788年) 柴田彦太郎

○ ——手習い・読書・算盤など精を出し、友達と争わず、詐を云わず、行儀正しく、
言葉も穏やかにありたし。——

資料11『撫育草』(1803年) 協坂義堂

○ 十二、三歳の頃までは、手習い・読書・算術をよく教へ学ばし。十四、五歳に相成り
候わば、わが職分・家業を精山し熟練致させ申すべく候。——

—— 左に記し候分は、ゆるやかせ和らかにせず、厳しく相いましめ、堅く守らせ申すべく候。

一、手習い・読み物・算術の稽古に怠り、不精なる事。

資料12『民家育草』（1827年） 大蔵永常

○ 筆算達者にて、智恵も人にこえ、その所の人にも用いられども、身、貧しき者あり。これは、手跡をよくすると智恵とがじゃまに成って、家業にうとき者なり。

4. 考察

江戸時代の数量指導は、生きるための実践的内容が重視されていることが大きな特徴の1つであった。そして、その内容は生活、つまり職業の異なるそれぞれの身分によって異なっていた。私達の生きる現代において、数量指導は主に学校においてなされているが、度々、その内容は実生活とかけ離れたものであるとの批判が投げかけられる。「学歴社会」、「受験競争」という言葉が生まれてもう長い時が経っているが、学ぶ内容はいわゆる受験用の試験にパスするためのものであり、これによりますます実生活とかけ離れたものになっている。

その変化は、江戸から明治へ時代が変わったあたりから始まっているものと思われる。時代が江戸から明治に移って、その社会システムは2つの点で大きく変容した。1つは、身分がなくなり、誰もが自由に職業を選択することができるようになったことである。また、学制によって、どの子どもも学校に行くことが義務づけられ、教育の担当は「家」から学校へ変わったのである。これにより、皆が同じ内容の教育を受けるようになったのであり、江戸時代のそれぞれの「家」を継承するための教育ではなくなった。江戸時代においては、生活やそれを成り立たせる仕事において直接的に役立つ数量指導の内容であったが、こうした社会システムの変容によって、数量の指導は即実践型の具体的な内容ではなく、何にでも広く対応できるその基礎となる知識や能力を身につける教養的な内容へと指導内容、方法についての考え方を変えたものとする。

社会システムが変わるということは、その中で生きる人間の生活を変え、それは教育の在り方も変えるものである。しかし、制度は変わってもそれまで根づいていた生活習慣や考え方などは急に変わるものではないだろう。江戸時代に重点のおかれていた、物の数を教えることや計算については、明治時代の幼稚園教育の中でその内容が引き継がれている^(註3)。しかしながら、その形式的な内容だけが引き継がれたと言えよう。徐々に、江戸時代における実践的な数量指導から、非実践的な指導へと変わっていったものとする。明治以降になると、欧米の思想や学問が急速に取り入れられ、日本の生活とは関係なしに数量構造のしくみや集合論がその形だけ、数量指導の内容に加わって、生活とその内容とがより離れたものになっていったと思われる。

本研究では、江戸時代に読まれた育児書から、数量に関する知識や能力が人間にとってどのように位置づけられ、どのように身につけるべきものとして捉えていたのかについて検討した。江戸時代は、育児書という形で育児や教育についての意図的な考えが多く述べられるようになった時代であった。しかしながら、こうした意図的な働きかけとは別に、生活の中で自然に伝承されてきたものもあったのではないだろうか。とくに幼児期の数量概念の発達を考えると、系統的かつ組織的な教育以前に、生活の中において自然に数量に関する事柄が子どもに経験という形で伝えられていたものと思われる。教化的な意味合いの含まれた育児書に見られる数量指導の考え方だけではなく、ごく自然な生活から生まれた人間にとっての数量やそれを生活の中でどのように子どもに伝えてきたかについても同時に検討する必要があると考える。

今後の課題として、子どもの生活や遊びの中においてどのような数量に関する経験が含まれているのか、それが数量に関する知識や能力の獲得とどのように関係があるのかということについて、歴史的に考察したい。

謝 辞

本論の執筆にあたりご指導いただきました本学柴崎正行教授に心から感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 山住正己、中江和恵「子育ての書1」 平凡社 1995 p.91
- 2) 前掲 p.22
- 3) 前掲 p.22
- 4) 山住正己、中江和恵「子育ての書2」 平凡社 1995 p.219
- 5) 前掲 p.220
- 6) 前掲 p.259
- 7) 前掲 p.284

註

- 1) 安齊智子「わが国の幼稚園における数量指導の変遷」東京家政大学研究紀要(1) 人文社会科学 第39集 1999年掲載予定
- 2) 山住正己、中江和恵「子育ての書1～3」平凡社 1995
- 3) (註1)と同じ

参考文献

- 1) 石川松太郎、直江広治 編「日本子どもの歴史3 武士の子・庶民の子(上)」 第一法規 1977
- 2) 石川松太郎、直江広治 編「日本子どもの歴史4 武士の子・庶民の子(下)」 第一法規 1977
- 3) 渡邊信一郎「江戸の寺子屋と子供たち」三樹書房 1995